

〈卷頭言〉

生活感を

育てる保育を

関口 はつ江



最近わが国の将来について、「情報化社会」であることが強調されている。例えばインターネットの発達で、居ながらにして、必要な情報が手に入り、選択、決定ができるようになると、わざわざ遠くまで出向いたり、周囲の状況を見て判断したり、よけいなことを見聞きしたり、折り合いを付けたりすることもない。向き合っているのは、機械の窓口を通して提示されている情報であり、反応は殆ど自分にとつての合理性に基づくので、目的

が明確な場合は、能率的であり、効率のよい生活ではある。

しかし、生活するとは、自分の目的達成のために一直線に行動することだけでは済まないことも多いはずである。回り道や、偶然の出来事から、思わぬ発見や結果が生まれたりする。予想を越えた様々な出会い、障害を乗り越える中で、視野が広がり、困難に対する抵抗力や自信がつく、世の中が見えてきて、生活することの面白さがわかつてくる。将来に備えて情報操作能力、選択能力が大切であるとされているが、その前に、情報の実体、機械の窓の向こうに広がる、こんがらかった世界（精神的にも、物理的にも）を美感していなければ、生活の実体が伴わない断片的な情報の操作に終わってしまうであろう。

機械との会話が多い生活の中で、子ども達はこれから、どうやってこころとからだを持つ自分について、自分と周りの物や人との関係について、その複雑なからくりを実感して行くのであろうか。

先日「集団降園は困る」という若い母親の意見を聞いた。幼稚園とすれば、全くのサービスとしてやっているので、もし保育者が一定の場所まで子どもをまとめて送る必要がなくなれば、保育者達は楽になるので大喜びをすることである。少しでも親の負担を軽くしたい、同じ方向に帰る子ども同士の関係が深まるのではないか、異年齢の子同士の助け合いもある。担任外の保育者との触れ合いの機会にもなり、その子の意外な面が表れたり、発見もある。園としては大変でもやり続けてきたことである。「困る」という理由は、親が

園まで迎えに来れば、「クラスの子同士の家での遊びの約束ができる」ということである。年長のことでもあるし、子ども同士でも何とかならないものかと思う一方、集団降園の意義を説明しても、決然としない母親の顔つきから、自分の観点からのみ物事を計らうとする堅さに心が通じないもどかしさを感じさせられた。高学歴の母親にこうした傾向が強く見られるが、自分は正しいという自信からか、自分の思いが通らなかつた経験などはなかつたからであろうか。

都合のよいものを選べる、気に入らなければ断ればいいという時代になり、子育て支援に対して国が用意しようとしているメニューもどんどん多様になってきている現在、時代の流れには逆らえないが、こうした環境の中で人はどうなつて行くのかを見極めながら、せめて幼稚園は、複雑で、わけのわからないことの中にも面白いこと、大事なことが沢山あること、自分や人や物事は決め付けてしまうことができないことなど、しなやかで、柔らかい心を育てる保育でありたいと願っている。

(郡山女子大学短期大学部
郡山女子大学附属幼稚園)